マルタ・アルゲリッチ、ほか豪華ピアニストたちが登場

ピアノ・フェスティヴァル「ピアノ・シンフォニック」

ルツェルン音楽祭が11月に開催していたピアノ・フェスティヴァルを終了した好機に、ルツェルン交響楽団が2月7～11日にかけて新しいピアノ・フェスティヴァル「ピアノ・シンフォニック」を立ち上げた。それに先駆けて招待されたエフゲニー・キーシン（p）&ルネ・フレミング（S）の公演の様子は、先月号の「海外レポート・スイス編」に記した。2月7日にルドルフ・ブッフビンダー（p）のオープニング・コンサートで正式に開幕、その後はジャン・ロンドーのチェンバロが響いた。

8日は待望のマルタ・アルゲリッチ（p）。まずはルツェルン交響楽団がブラームス「交響曲第3番」を、首席指揮者ミヒャエル・ザンデルリンクの棒で内向的に演奏した。重厚なうねりというよりは、澄んだ音の控えめな表現、それはそのまま、後半のシューマン「ピアノ協奏曲」へつながることになる。

アルゲリッチは登場から少し笑いを取って、場を和ませる。巨匠との共演に気合い満々の、子や孫世代の前のめりをほぐすように……。そのギャップが冒頭、音楽にも如実に表れた。アルゲリッチはフレーズを歌えず、両者のテンポがギクシャク、オーケストラは萎縮している。しかし、内に秘めた表現への欲求は共通しており、展開部でのクラリネットの美しさなども突破口となって、段々火が点き、第1楽章は満足感で終わった。

第2楽章は止まる寸前のような遅いテンポで始まった。途中、ピアノ音が軽すぎる部分もあり、体幹の衰えを感じてしまったが、転がるような美しい音で弾き終えると大拍手。アンコールにはシューマン《子供の情景》から〈見知らぬ国より〉と、J・S・バッハ「イギリス組曲第3番」のガヴォットを続けて演奏した。

9日昼はマリー=アンジュ・グッチ（p）のリサイタルだったが病欠、夜は前半にヨアフ・レヴァノン（p）を迎えてパデレフスキの協奏曲、後半はヴィキングル・オラフソン（p）のリサイタルという、豪華プログラムで批評家たちを喜ばせた。

10日昼はルカーシュ・ヴォンドラチェク（p）のリサイタル、夜はジョナサン・ノット率いるスイス・ロマンド管弦楽団がカティア・ブニアティシヴィリ（p）を連れて、ドイツ&オーストリア・ツアーに出る旅程で出演した。オネゲル「交響的運動第2番《ラグビー》」で楽しませた後、ブニアティシヴィリが登場し、約1カ月前にラフマニノフからチャイコフスキーに替えた協奏曲を、グイグイ引っ張りながら弾き始めた。迫力と豪華さの嵐で聴衆

新たな音楽祭「ピアノ・シンフォニック」。2日目に登場したマルタ・アルゲリッチ、その存在感はやはり別格だ ©Philipp Schmidli

人気ピアニストのカティア・ブニアティシヴィリも登場、十八番のチャイコフスキーを披露した ©Philipp Schmidli

を大満足させた第1楽章だった。第2楽章は転がり落ちるような音と内的な表現が効果を生み、第3楽章は水を得た魚のようなスピード感で、管楽器もきらめきで応え、スリリングな共演だった。アンコールはマルチェッロ（バッハ編）「アダージョ」。後半はストラヴィンスキー《ペトルーシュカ》で、ノットのリズム感が冴え、流れるフレーズで遊び心を散りばめながら、色鮮やかに、ノットらしく仕上げた。

11日昼はレヴァノンのリサイタル、夜はアルゲリッチ&フレンズという貴重な体験となった。プログラムに印刷された前後半を交替して、まずはトーマス・ハンプソン（Br）の歌うシューマン《詩人の恋》。アルゲリッチは「ピアノ協奏曲」で弾いたときよりロマンティックで、これだけレガートに弾かれると歌手はたいへんだ。直筆譜を研究しているというハンプソンは、通常の16曲に4曲加えたかたちで演奏した。1曲目の前奏からアルゲリッチのピアノは歌うが、ハンプソンは「ア」の母音が深過ぎて甘くならない。アルゲリッチは曲が終わる数段前にページをめくるように指示し、暗譜しているようだ。7曲目でやっと二人が同じレヴェルに立ち始めた。ドラマティックな重い曲では二人の波長が合う。12曲目に挿入された曲もよい。〈僕は夢の中で泣きぬれた〉からは芸術的。〈昔の、よこしまな歌草を〉など、前奏からドラマティックで、巨大なスケール感を膨らませるアルゲリッチについていかれる歌手は、ほかにいないだろう。

後半ハンプソンが客席で聴くなか、ミッシャ・マイスキー（vc）とショパン「チェロ・ソナタ」を演奏した。二人の息はピッタリだが、アルゲリッチはやはり格段上で、真の音楽家として存在していた。　取材・文＝中 東生

最終日前半、アルゲリッチは名バリトンのトーマス・ハンプソンと《詩人の恋》で共演。クライマックスでの芸術的昇華に聴衆は魅了された ©Philipp Schmidli

後半はミッシャ・マイスキーとショパン「チェロ・ソナタ」を。共演歴もひと際長い盟友だ ©Philipp Schmidli